第11章
三川内の歴史と文化財



三川内の位置

この地域の小中学校

小学校：三川内小学校

中学校：三川内中学校

第11章　三川内の歴史と文化財

焼き物の里

三川内地区は、佐世保市の東部にあって、南は東彼杵郡波佐見町に、東は佐賀県有田町に接しています。

三川内といえば、何といっても約400年も続く焼き物の里であるということです。国道の南側の三川内町、塩浸町、三川内本町、新替町、江永町そして木原町には古い窯跡が残り、いまでも伝統工芸である三川内焼の窯元が、日用品や高級陶磁器を作り続けています。



三川内皿山



横手地区の棚田

また、国道北側の横手、心野、口ノ尾、桑木場町は、隠居岳（標高670メートル）の南斜面にあって、棚田が広がる農村地域です。このように、三川内は農業と窯業が同居する地域なのです。

古くは「折尾瀬」という地名でした。1362年（正平17）の古文書に「折宇瀬式部蔵人入道代、同次郎蔵人源義親」という人物の名があり、少なくとも室町時代から折尾瀬という地名だったようです。

早岐から三川内を挟んで、佐賀県有田町（旧西有田町）から佐賀県伊万里市にかけては、長い谷となっています。この谷筋は古くから人々の行き来が多かったらしく、江戸時代直前には茶碗や皿を焼く陶工が往来しています。そのため、江戸時代には早岐から伊万里市へ通じる伊万里街道があり、現在は鉄道や国道、西九州自動車道が通っています。

古い古墳文化があった

伊万里街道は、1882年頃（明治15頃）に一部が国道に改修されました。国道といっても荷車が通るような道なのですが、その工事中に三河内駅東の堂ノ前から、古墳時代の土師器と呼ばれる素焼きの壺が発見されています。

遺跡から発見される土器は、壊れて破片の状態となっているのが普通です。ところが、堂ノ前の土師器壺は完全な形をしているのです。また、わざと小さな穴が2ヵ所開けられています。このような例は、埋葬や祭りに使われた土器に良く見られます。



堂ノ前の土師器壺
うつわ歴史館に展示中

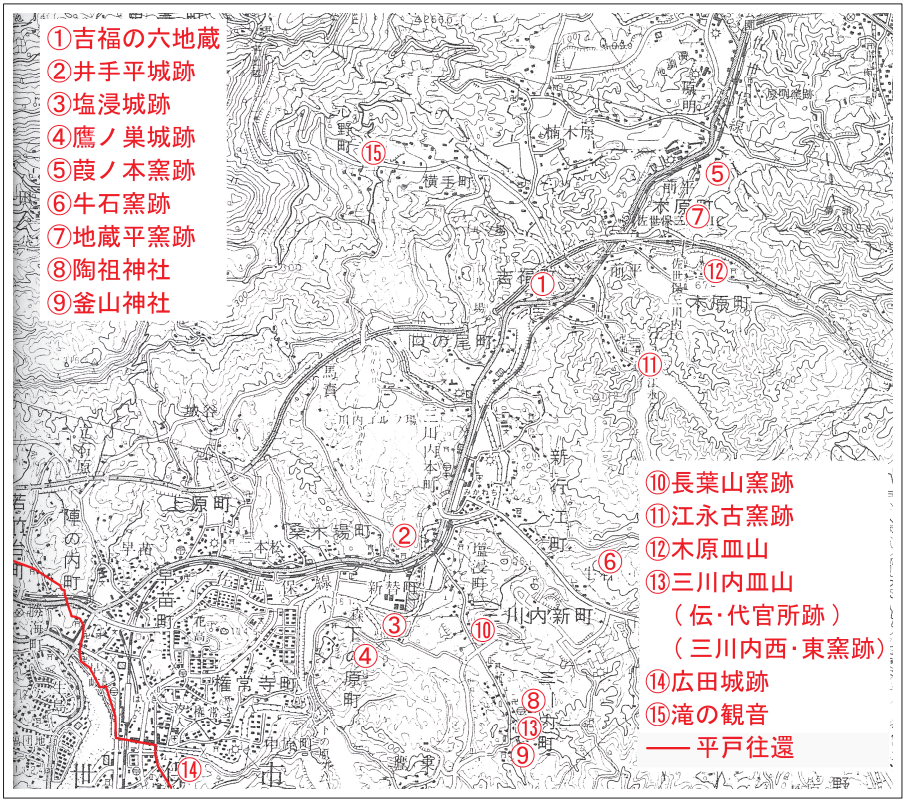
この壺は、今から1,600年前頃の古墳時代前期のものですが、佐世保市にはその頃の遺跡は少なく、三川内にその時代のムラがあった可能性があることは、佐世保市の歴史の上で大変重要です。

コラム～堂ノ前の壺の「再発見」～

堂ノ前の壺は、120年も前に発見され、1911年（明治44）の『三河内窯業沿革史』に掲載されていることは分かっていたが、永く所在は不明であった。

2001年（平成13）に三川内焼美術館の展示品調査のため、三川内の嘉泉製陶所に出向いた係員が、展示棚の陶磁器に混じって置かれているのを見つけた。実に100年ぶりに再発見されたのである。

今は所有者の好意により三川内本町の「佐世保市うつわ歴史館」に展示されている。



三川内の地図

三川内地区には、旧石器時代や縄文時代の遺跡がいくつかありますが、あまり良好なものではなく、弥生時代や古墳時代の遺跡はまだ発見されていません。しかし、堂ノ前の土器から分かるように、三河内駅の周辺には、古墳時代の遺跡が眠っていることは間違いありません。

歴史の上でこの地方が現れるのは、室町時代や戦国時代になってからです。右の写真は吉福町の国道沿いにある[1]六地蔵です。「天文十四年三月 平朝臣周防守純清」という銘が刻まれています。名前から見て大村の人らしく、1545年（天文14）頃の三川内は大村領だったことを示しています。


吉福の六地蔵

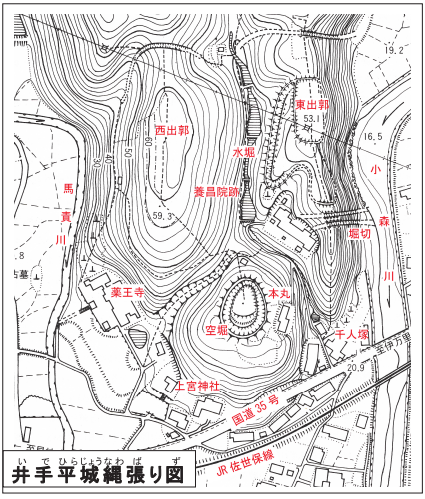
1 「六道をもって衆生（民衆）を救う」という仏教の教えを現した石仏。六道とは、天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄のことで、それぞれの「道」を守る仏が彫られている。仏教では、人間は死ぬと生前の行いに応じてこの六道を巡ると説かれた。そのため人々はこの六地蔵を拝んで苦難から救われようとした。

井手平城の戦い

早岐から三川内に向かう途中、新替町の国道脇に城持山薬王寺が見えます。この薬王寺の裏手の丘に井手平城跡があります。

戦国時代の終わり頃、三川内は平戸松浦氏の領地となっていました。そして小森川を挟んだ向かい側は大村領だったと考えられます。この城は広田町の広田城（第9章広田参照）と並んで平戸方の最前線の城だったのです。


井手平城跡遠望



井手平城縄張り図

1586年（天正14）に、この城を大村氏が島原の有馬氏、西有田氏、唐津の波多氏と連合して攻めました。井手平城には城主岡甚右衛門をはじめ多数の城兵がいましたが、夜襲であったらしく、不意をつかれたことで落城してしまいました。この戦いで岡甚右衛門と長男、次男そして副将の堀江大学など300人が戦死したと伝えられています。

勢いに乗った大村方は、次いで広田城を囲みましたが、こちらは籠城に成功するうちに平戸方の援軍が駆けつけて、川棚に撃退されています。



井手平城の空堀

城跡には大きな郭が2ヵ所あります。本丸は薬王寺の東にある丘の頂上にあって、直径約50メートルの二重の土塁に囲まれた平場となっています。

もう一つが東出郭と呼ばれるもので、本丸の谷を挟んだ北側にあります。こちらの中心部は、幅約20メートル、長さ40メートルの方形の土塁に囲まれた区画になり、東側は小森川へ落ちる急な崖、背後の尾根に2本の空堀、南にも数本の空堀、さらに西の谷底には小さな堤でせき止めた水掘が3つ並んでいます。

発掘では、本丸には遺物がほとんどなく、東出郭からは中国製の茶碗や皿、小刀、鉄鏃、刀の鍔、鉄砲玉などが見つかりました。また、笄と呼ぶ武士が髪を整える道具、火鉢や炭壺、調理に使うすり鉢や挽き臼など豊富な遺物が発見されました。

遺物の出方から見ると、落城したものの火災にはあっておらず、建物はそのまま残っていたようです。そして、戦いの後に関係者が来て、家財道具などを整理したようです。遺物は、建物の縁先にまとめて捨てられていました。茶碗などは割れていましたが全部つながりました。つまり、建物から投げ捨てたときに割れたのです。

このことから、東出郭に岡甚右衛門の屋敷があったようです。本丸は、本格的な戦いのときに立て籠ったものか、あるいは見張り台のような役割があったのかもしれません。



すり鉢の出土状態



東出郭出土品

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

千人塚

本丸と東出郭の間の谷を出たところに、井手平城の戦死者の墓と伝えられる千人塚があります。自然石の墓や、五輪塔などが小道脇に40基ほど並んでいます。

詳しく調べると、1474年（文明6）の銘のある僧侶の墓を最古として、1500年代から江戸時代の初め頃のものです。井手平城の戦いのあった時代の墓もあって、一部はその戦死者の可能性もありますが、もともとは近くに古い寺があったのかもしれません。



千人塚

薬王寺と岡甚右衛門の供養碑

薬王寺は井手平城の戦いの後、平戸領主の松浦鎮信が戦死者を弔うために建てた寺です。その山門をくぐった左側に、岡甚右衛門の供養碑があります。1616年（元和2）に遺族が建てたもので、仏石灯籠と由来を記した碑石からなり、仏石灯籠の正面に岡甚右衛門、左に長男、続いて次男の名が刻まれています。この供養碑は井手平城の落城から30年後、つまり30回忌に合わせて建てられたものです。この供養碑は佐世保市の文化財に指定されています。



薬王寺の仏石灯籠と碑石

第11章

ところで、井手平城が落城したとき、300人が戦死したと伝えられていますが、実際に城跡を見てみると、井手平城は300人が立て籠るには狭すぎるようです。実際に戦死した人数は、もっと少なかったと考えられています。というのは、薬王寺境内にある別の供養碑には、岡甚右衛門以下21人の名前が刻まれ、その最後に「都合三百人高」と刻まれているのです。これは、供養碑に名前を刻まれた人たちの知行地（領地）の合計を記したものと考えられています。この「三百人高」が戦死者300人として伝えられたのでしょう。

コラム～井手平城の戦いはなぜ起こったか～

井手平城の戦いは、大村氏がかつての領地を取り戻そうとした戦いには間違いないが、その背景には何があったのか。まず、平戸松浦氏や大村氏の動向に大きく影響していたのが、佐賀の戦国大名、龍造寺隆信である。大村純忠は、龍造寺氏の圧力により波佐見で隠居させられていた。

龍造寺隆信は平戸松浦氏や大村氏を抑えて、残る島原の有馬氏を1584年（天正12）に攻めた際、島原の沖田畷で戦死してしまった。龍造寺からの縛りがなくなった大村純忠は、大村の当主に復帰した。

もう一つは、豊臣秀吉の天下統一である。1587年（天正15）には薩摩を攻めて、九州を平定し、諸大名の領地を安堵している。安堵とは、天下人となった秀吉がそれぞれの大名の領地を保証することで、各大名は秀吉の家来になることを意味する。そうなってしまっては、大村氏は平戸松浦氏に戦いを挑んで領地を取り戻すことはできなくなる。それは私の戦い、つまりケンカとなって、結果として両者が取りつぶされることになるのである。

大村純忠はその情勢をよく分析して、秀吉の九州平定前に駆け込みで領地奪還を図ったのである。

コラム～吉福の泣きびすさま～

国道35号線沿いの吉福町に、大小2つの板碑が建っている。これは母子のものといわれ、井手平城の戦いのとき、城方の武士の妻と子が夫の帰りを待ちわびて死んでしまい、これを哀れに思った村人が供養のために建てたといわれている。これとほぼ同じ言い伝えが広田にも残っている。（第9章広田参照）



吉福の泣きびすさま

「泣きびすさま」の名前の由来は、子どもの泣き声で悪霊が退散した故事によるものかもしれない。

塩浸城

戦国時代の国境には、お互いの城が向き合って造られることが多かったようです。平戸方の城が井手平城であれば、大村方の城と考えられるのが塩浸町にある塩浸城です。

塩浸城は、小森川と三川内川の合流点にある細長い丘の上に造られています。天然の地形を利用し、北と南は急な崖になっています。さらに空堀で西と東を防御して、難攻不落の構えを見せています。



塩浸城跡遠望

一般的に、山城には日頃から多くの城兵がいたわけではありません。いざ戦いとなった時に使うものだったのです。井手平城の戦いも、夜ひそかに多くの軍勢を送って攻め落としたと考えられます。

コラム～はさみ道～

江戸時代の初めより、波佐見から山を越えて、三川内皿山へ陶石や窯の燃料を運ぶ「はさみ道」がある。細い山道であるため、主に馬の背に荷を乗せて運んだようだ。

この道は、波佐見から塩浸城への連絡路であり、さらに1586年（天正14）の井手平城攻めのときに、大村方の軍勢が通った道でもある。

三川内で焼き物は井手平城の戦いのあと、わずか10年後には焼かれ始める。軍事道路が、平和な時代になって焼き物の道になったのである。



はさみ道

焼き物の里はじまる

豊臣秀吉の天下統一が影響して、井手平城の落城の悲劇が生まれましたが、三川内焼もまた、秀吉による日本史の大きな流れのなかで始まるのです。

秀吉は天下を統一したあと、今度は明国（今の中国）の征服をしようと[2]朝鮮半島に攻め入ります。第1回が1592年（文禄元：文禄の役）、2回目が1597年（慶長2：慶長の役）になり、全国の大名を動員しました。もちろん、平戸松浦氏や大村氏も出兵に動員されています。

そのなかで、文禄の役で動員された唐津の波多三河守は、朝鮮半島での戦いぶりが悪く、秀吉の怒りを買って取り潰されてしまいました。

2 朝鮮では壬申・丁酉の倭乱と呼ぶ。

波多氏は、岸岳（現在の唐津市相知町）に城を持ち、また、岸岳に窯を築いて陶工を保護していたのですが、保護者である波多氏がいなくなったために、陶工が各地に離散してしまいました。世に「岸岳崩れ」と呼ばれるものです。



岸岳城跡

1592年（文禄元）の岸岳崩れで離散した陶工の一部は、有田、波佐見、三川内に窯を開いて、焼き物を焼き始めます。佐世保では木原町の葭ノ本窯（県指定史跡）が、その離散陶工が始めた窯と考えられています。そのため、岸岳系統の唐津焼を焼いているのです。



葭ノ本窯跡の発掘調査



葭ノ本窯跡出土品
佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

当時、唐津の陶工が開いた窯は、葭ノ本窯のほか、木原町には柳ノ本窯、新替町には牛石窯がありました。窯は30年ほど続いたようです。その後、窯は別の場所に築きなおされます。

もう一つの焼き物の流れ　巨関と高麗媼の来日

朝鮮に攻め込んだ日本軍は、李氏王朝軍や明国軍、民兵の激しい抵抗によって苦戦を強いられ、ついには秀吉の死によって引き揚げました。戦いは多くの人命と財産を失うものでしたが、逆に朝鮮の文化を得るものでもありました。

出兵した諸大名は、1598年（慶長3）、朝鮮から引き揚げる時に、自国の産業を興し、経済を高めるために朝鮮の人たちを[3]連れ帰りました。その人たちは、料理や裁縫などの技術者たちだったようです。そして、焼き物を生業とする陶工もそのなかにいました。

当時、日本の焼き物といえば、陶器や土器しかなく、固くて薄い磁器は高級品として中国から輸入するしかありませんでした。その磁器の生産に諸大名は目をつけたのです。

3　諸大名が多くの朝鮮人技術者を連れ帰ったため、朝鮮では技術者が不足し、焼き物などの産業が廃れてしまったといわれている。



焼き物を作る高麗媼

イラスト：大石 博

平戸の松浦鎮信が連れ帰ったのは、巨関と高麗媼をはじめとする朝鮮陶工たちでした。そのうち巨関は、朝鮮半島南部のコモカイ（釜山の西、鎮海市あたり）の出身といわれています。

高麗媼は、唐津椎ノ峰の中里茂右衛門と結婚して焼き物を作っていました。しかし、夫が亡くなったため、1622年（元和8）に子の茂右衛門を連れて、朝鮮出身の陶工をたよって三川内へ来て、長葉山で窯を開きました。

巨関は、日本名を久兵衛と称し、最初は平戸島の中野で窯を開いたようです。

そして、巨関の子といわれている今村三之丞は、唐津椎ノ峰、波佐見三股、有田南川原を渡り歩いて焼き物の研究をしていました。

その研究を平戸藩から認められ、江戸時代の初め頃に、平戸藩御用窯（藩直営の窯）の初代棟梁になります。

御用窯棟梁となった三之丞は、高麗媼の長葉山窯を最初の御用窯として利用しています。これは、巨関と高麗媼が来日以来の知り合いで、三之丞とも幼い時から親しかったことから、高麗媼は窯の一部を使うことを認めたのでしょう。

高麗媼（中里エイ）は、100歳ほどの長寿を全うして陶祖となり、三川内の釜山（窯山）神社に祀られています。



釜山大明神

コラム～二人の陶祖～

三川内焼の発展に功績があったとして、高麗媼が釜山神社に祀られ、御用窯二代目の今村弥次兵衛（如猿）が、やはり陶祖として、陶祖神社の祭神になっている。

高麗媼（中里エイ）は陶器を焼いたが、それまで三川内にはなかった藁灰を使った茶器を作っている。それは大変斬新な焼き物であった。また、最初の御用窯にも参加している。



陶祖神社

ではなぜ、初代の御用窯の棟梁であった今村三之丞が陶祖にならず、2代目の弥治兵衛（如猿）が陶祖なのだろうか。



三ツ葉葵文の皿（破片）

最初の御用窯である長葉山窯では、磁器技法の技術確立期であり、輸出品や日用雑器を焼いたが高級品は焼いていない。2代目弥次兵衛の屋敷跡とする伝・代官所跡の発掘調査では、三ツ葉葵文の大皿の献上品や薄手高級品の皿など、初期の御用窯の作品である磁器が大量に出土したことにより、完成期は三川内東窯に移ってからの弥次兵衛（如猿）の代であることが分かった。

つまり、三之丞が基礎をつくり、如猿が御用窯を確立したのである。従って、如猿が陶祖になったのである。

コラム～陶祖たちの子孫～

三川内三皿山には、陶祖の高麗媼（中里エイ）や今村弥次兵衛（如猿）の子孫の人たちがいる。三川内山だけでも中里家は33軒、今村家は22軒、御用窯を開くとき、三之丞が伊万里の椎ノ峰から呼んだ画工や陶工のうち、福本弥次右衛門を先祖とする福本家は27軒、窯焼方の金氏太左衛門を先祖とする金氏家は12軒になる。

今でも、多くの家が陶磁器の生産や販売に従事している。

コラム～瀬戸に伝わった三川内の技～

焼き物のことを瀬戸物ともいう。それほど瀬戸（愛知県瀬戸市）は、平安時代から都へ焼き物を供給することで繁栄していた。

ところが、江戸時代になると、磁器を生産する技術のない瀬戸は立ち行かなくなってしまった。そこで、瀬戸の陶工加藤民吉は、磁器の技術を習得しようと九州に来た。しかし、佐賀藩有田、大村藩波佐見、平戸藩三川内の窯場いずれでも、焼き物の技は門外に出すことが禁じられていた。



市ノ瀬窯跡（県指定史跡）

そこで民吉は、三川内から分かれた佐々の市ノ瀬窯に、1804年（文化元）に住み込むことに成功し、瀬戸に磁器の技法を持ち帰ることができた。

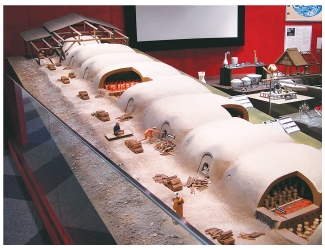
民吉の尽力で、瀬戸はかつての繁栄を取り戻したのである。民吉は窯神神社に祀られ、瀬戸の陶祖（磁祖）になったのである。

三川内の窯跡

江戸時代、三川内地区には、三川内皿山、江永皿山、木原皿山の3地区の窯場がありました。そのため平戸藩は、皿山代官所を設けて燃料や製品の管理をしていました。この3地区では、約400年の間焼き物を作り続けています。そのため、古い窯跡が各地に残っています。

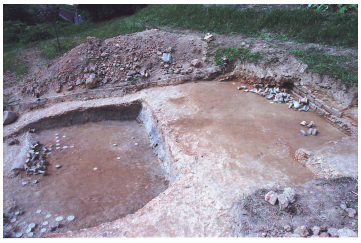
1500年代の末に、岸岳崩れの影響で唐津系の窯が開かれました。登り窯と呼ばれ、器を焼くドーム状の部屋が幾つもつながって斜面を登ります。

木原町の葭ノ本窯、柳ノ本窯、そして、新替町の牛石窯が三川内で最初に焼き物を焼いた窯です。窯の部屋は、縦横2メートル、全長は30メートルの大きさです。これらの窯は1630年頃まで続きました。



登り窯の模型

うつわ歴史館所蔵



調査中の長葉山窯跡

次に、木原町の地蔵平窯や三川内町の長葉山窯が開かれました。この二つの窯は1630年頃に始まり、前半は陶器を焼いていましたが、後半は磁器を焼いています。陶器から磁器に移り変わる時代の窯です。窯の部屋は、縦横3メートル、全長は40メートル程度になります。このうち長葉山窯が最初の御用窯となったことは、前にも述べた通りです。

江永皿山には、三川内や木原皿山より遅れ、1600年代の後半に窯が開かれました。江永古窯です。この窯では、最初は輸出品の磁器を焼きましたが、その後国内向けの刷毛目陶器を焼き、1700年代の後半もさらに低価格の粗製磁器を焼いています。それらは大坂方面で大量に消費されたものです。



江永古窯跡

1700年代に入ると、三皿山は大窯の寄り合い(共同)窯にまとまります。木原皿山は木原西窯と東窯、江永皿山はさきの江永古窯、三川内皿山は三川内東と西窯です。

窯の規模は最大になり、三川内東窯は、部屋は縦5メートル、横7メートルで20数室が連なり、全長120メートルにもなります。

この窯は同じ場所で何回も造りなおし、明治から、大正、昭和まで焼き続けた窯もあります。

コラム～御用窯の移り変わり～

今村三之丞が、平戸藩御用窯の棟梁に任じられたのは1637年(寛永14)であり、この時の御用窯は長葉山窯である。この段階は、高麗媼の長葉山窯を間借りする形だったと考えられる。

1668年(寛文8)に三川内皿山に御細工所が整備され、移転する。御用窯とは、細工所と窯がセットであり、細工所は、陶祖神社脇にある細工所棟梁を代々務めた今村家(伝・代官所跡)であった時期もある。



伝・代官所跡の発掘

窯は1600年代の後半は三川内東窯、1700年代になると三川内西窯に代わる。しかし、御用窯として全部を使う訳ではなく、火まわりの良い部屋の1～2室を御用窯とし、他の部屋では、各窯元が日用雑器を主体に焼いたと考えられている。

赤絵も焼いた

江戸時代、白い焼き物に赤などの顔料で絵付けしたものを赤絵と呼びます。これは有田の独占品で、初代酒井田柿右衛門が創意工夫の末に完成させた話は有名です。

三川内でも江戸時代の終わり頃には、輸出用として赤絵のコーヒーカップを作り始めますが、実は御用窯の初めの頃に、すでに三川内でも作られていたことが分かりました。

伝・代官所跡（平戸藩御用窯の棟梁、今村家屋敷跡）の発掘で、1660年頃の溝から赤絵の皿や碗が見つかりました。技術的には有田を手本としたものですが、有田よりわずかに遅れて、すでに赤絵技術を持っていたことは驚きです。

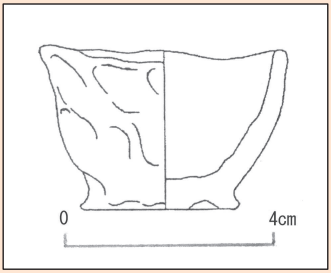


伝・代官所跡出土の赤絵皿

しかし、20年ほどで作られなくなっています。原料の入手などの問題もありますが、何といっても、有田の陰にあって知名度が低く、販売力や生産力などで対抗できなかったのでしょう。

コラム～御用窯と子どもの作品～

2001年（平成13）に行なわれた、平戸藩御用窯の創業期の遺跡である伝・代官所跡の発掘調査の時に、溝の中に捨てられた初期御用窯の優れた作品に混じって、明らかに幼児が作ったと分かる小さな坏が出土した。この坏が出土した溝は、御用窯と御細工所が三川内山に移転した1668年（寛文8）頃に掘られたものである。



小坏の実測図

この時代は、初代御用窯棟梁の今村三之丞が存命中で、2代目の如猿の代だった。この小さな坏は、後に3代目となる弥次兵衛が、3歳前後の頃に作ったのではないだろうか。

一部とはいえ、御用窯を私的に使うことが出来るのは、棟梁だった三之丞以外に考えられない。三之丞は孫かわいさのあまり、釉薬をかけて御用窯で本焼きしたのだろう。祖父や父を真似てうつわを作り、焼いてくれとせがむ幼い弥次兵衛と、困ったように笑う三之丞の姿が目に浮かぶようだ。

江戸時代の三川内焼

三川内焼は御用窯と民窯で焼かれていました。御用窯では藩の注文品を作りましたが、それらは朝廷や将軍家、大名などへの贈答専用でした。そのため、一般の人たちへは民窯で焼かれた焼き物が供給されています。

1800年代になると、御用窯ではヨーロッパ向けの赤絵コーヒーカップが作られるようになり、長崎から輸出されました。一方、民窯では当時大坂にあった「お雀紅」という口紅の店が紅入れに使った紅皿や、高級な酒杯も大量に焼かれるようになりました。



献上唐子焼

市指定無形文化財：中里勝歳氏（平戸松山窯）

郷土の人～御用窯御細工人・藤本熊治、恒太郎親子～



（左）藤本熊治　（右）恒太郎

※写真提供：五光窯

熊治　1828年（文政11）～1898年（明治26）

恒太郎　1860年（万延元）～1939年（昭和14）

藤本家は代々、平戸藩御用窯の御細工人を勤めていた。第9代の熊治は最後の御細工人となるが、長崎で息子の恒太郎とともに肖像写真を残している。髷を結っており、佐世保地方で最も早く写真に収まった人物である可能性が高い。

表情が硬いのは、何度も撮影に失敗したために怒った顔になっていると言われている。しかし、当時は撮影のために数分間全く動くことができなかった。したがって、緊張した顔になっているのではないだろうか。

撮影時期は明治維新（1868年：明治元）前後、場所は日本最初の営業写真家である上野彦馬の写真館であるという。

三川内焼のその後

明治維新を迎え、藩がなくなると御用窯は民間に払い下げられました。御用窯は萬宝山商舗と名を改め、赤絵のコーヒーカップなどを焼いていましたが、伊万里や有田の焼き物に押されてその経営は苦しいものがありました。



嘉泉製陶所に残る伝習所の塀

こうした中で、民営化された旧御用窯を中心として、三川内焼の再興に努力したのが豊島政治でした。豊島は新たな販路を開拓するなど、三川内焼の建て直しを図る一方で、1899年（明治32）には[4]三川内陶磁器意匠伝習所を開設し、御用窯以来の優れた焼き物の技術の継承に努めたのです。

豊島の努力によって、平戸藩御用窯の優れた技術は若い陶工たちに受け継がれました。そして、さらに新しい意匠が加えられて、今日の三川内焼に伝承されているのです。

4 伝習所には陶画と成形の2科があり、8～9月の2ヶ月間授業を行い、三川内近隣の窯元などの子弟（小学生から大人まで）が学んだ。伝習所は、1918年（大正7）に折尾瀬村立窯業徒弟養成所（1907年（明治40）に創立された村立工業補習学校が改称）が設立されるまで続いた。

郷土の人～三川内焼の再興に尽くす・豊島政治～

1852年（嘉永5）～1919年（大正8）



豊島政治
※写真提供：嘉泉製陶所

生まれは折尾瀬村（現三川内地区）桑木場である。1874年（明治7）に古川運吉から萬宝山商舗（明治時代になって民間に払い下げられた元御用窯のこと）を引き継ぎ、三川内山製陶業の再建にあたった。弱冠22歳のときである。

その後、1885年（明治18）旧皿山代官所跡に商店を開設し、貿易も行う。さらに韓国や中国へ陶磁器の視察に行き、技術の向上や消費者に合せた意匠の改良を唱えるとともに、内外の博覧会へ出品し、三川内焼の価値を高めた。

豊島は、1899年（明治32）に開設した三川内陶磁器意匠伝習所の所長を務めたほか、三川内郵便局を誘致して初代局長となるなど、三川内焼の再興と後継者育成、また、公共のために尽くした人である。

地域の年表

時　代	出　来　事
旧石器時代	約20,000年前に横手遺跡で狩りが行われる。
古墳時代	堂ノ前の土師器がある。
室町時代	
1362年（正平17）	彼杵一揆に折宇瀬式部蔵人入道代、同次郎源義親の名が現れる。
戦国時代	
1545年（天文14）	平朝臣周防守純清が吉福の六地蔵を建てる。
1564年（永禄7）	三川内は武雄の後藤氏から譲られ、平戸松浦氏の領地になる。
1586年（天正14）	大村・有馬・波多の連合軍が井手平城を攻め、落城させる。
1593年（文禄2）	この頃、岸岳崩れの陶工が葭ノ本窯を築き、焼き物を焼き始める。
1598年（慶長3）	松浦鎮信（法印）、朝鮮の役から帰国のとき、巨関など陶工を連れ帰る。
江戸時代	
1622年（元和8）	高麗媼、長葉山に開窯する。
1633年（寛永10）	今村三之丞が針尾三ツ岳で白磁鉱（網代石）を発見する。
1638年（寛永15）	今村三之丞が藩主より皿山代官棟梁の職を受ける。
1643年（寛永20）	平戸藩三皿山（三川内・江永・木原）の役所を整備する。
1650年（慶安3）	平戸中野窯から三川内へ陶工の移転がほぼ終了する。
1662年（寛文2）	今村弥次兵衛（如猿）が天草陶石を発見する。（別に1712年説あり）
1668年（寛文8）	御用窯が三川内に御細工所などを新築して移転する。
1683年（天和3）	木原皿山から横石長右衛門が江永山に移る。江永古窯開窯。
1699年（元禄12）	平戸藩主松浦鎮信（天祥）が三川内焼を朝廷に献上する。
1702年（元禄15）	御細工所棟梁の今村弥次兵衛が如猿の号を賜る。
1830年（天保元）	三川内産コーヒーカップの輸出が始まる。
近代	
1871年（明治4）	松浦家が平戸焼物産会所の業務を古川運吉へ譲渡する。
1874年（明治7）	豊島政治が古川運吉より平戸焼物産会所を受け継ぐ。
1886年（明治19）	折尾瀬小学校ができる。
1889年（明治22）	折尾瀬村の村制が敷かれる。
1897年（明治30）	鉄道開設、三河内駅ができる。
1899年（明治32）	陶磁器意匠伝習所を開設する。
現代	
1955年（昭和30）	折尾瀬村が佐世保市に編入される。
1996年（平成8）	うつわ歴史館・三川内焼美術館開館